



北海道 剣淵町



「心のふるさと」絵本の里づくり 「人・夢・大地」やさしさ奏でる絵本の里けんぶちの25年

剣淵町って何処にある町？

剣淵町は明治32年に屯田兵が入植し、昼なお暗い原生林を切り開き、多くの苦難を乗り越え築かれた北海道開拓の町であります。

北海道の中央、旭川市から国道40号線を約50km北上した位置にあり、総面積は131・20km²の面積を有し、名寄盆地の南部に属しています。

町の中央部を天塩川の支流である剣淵川が流れ、それに沿って広がる平坦低湿地帯と、それを囲む東部丘陵地並びに西部の小山脈となっており標高は最高440m、最低129mの典型的な盆地であります。

気候は、内陸性気候に属し夏はプラス30℃、冬はマイナス30℃をそれぞれ超える寒暖の差が激しい、人口3,382人の純農村であります。

農産物は、水稲、小麦、ジャガイモ、大豆等を中心に北海道で生産される野

菜は何でも育ち、流通環境や農業政策に作付けが左右される状況にあります。

絵本で町おこしができるの!?

ここで、なぜ、剣淵が絵本で町おこしをするようになったのか少しふれたいと思います。

頃は、昭和63年2月、世の中はバブル絶頂期でありました。

札幌ススキノのある場所で、「どちらから来られたの?」と尋ねられた時に「剣淵」と話すと「酒蔵のある町ですか、剣菱ですか?」などと会話が弾むことがあり悔しい思いがありました。けして若くはない仲間たちは、町づくりに思いを巡らしているときでありました。当時、北海道では、一村一品運動が提唱されており、各市町村が運動を通じて活性化を模索しているときでもありました。

剣淵は、一般農産物は何でも栽培できると、寒暖の差が大きいことから良

剣淵町キャンペーンガール



「ぶっちな」

質の野菜が収穫できる気候でもありません。このことは、特産品としての絞るまでの状況にありませんでした。

このようなき、商工青年部主催の講演会があり、パリから帰国して隣市に住む版画家から一つの言葉がありました。「あなたたちは、お金を儲けることしか考えていない。日本人は、パリに旅行しても、ブティックでは熱心に買い物をするが、美術館や博物館をじっくりと鑑賞することなく帰ってしまふ。商売をされている貴方達はお金のことしか考えていない。日本人は金と物を大事にするが、人とし、芸術を忘れていては世界に通用しない。」とバツサリでした。

講演でガツンと言われたことがきっかけで発奮、芸術について学ぶことになっていくのでした。その後、出版社の編集長を紹介されることになり、絵本に関する講演会を企画することになったのでした。

講演後の懇親会で「このような田園風景はフランスの農村風景に似ている。フランスでは、芸術家が離農後の農家住宅に移り住み、自給自足の生活しながら創作活動に励んでいる。時間のゆったりした流れや空気の爽やかさの中に絵本原画の美術館などがあると良いですね。」と教えられたことがオジ

サン達と絵本との接点になるのでした。

原画は、絵本を出版してしまつと編集者の机の横とか棚の上等に保管され、日の目を見ない事になってしまいます。中には、芸術的に優れている作品もあることからヨーロッパでは保存も兼ねて美術館に所蔵されている作品もあり、絵本というものの奥の深さを知ることになっていくのでした。

自然環境・時の流れ・フランスの田園風景に似ていることなど、絵本で町おこしをやらない手はないと考えたのでした。



▶初代絵本の館

絵本を題材とした町おこしは、すきので有名になるかもしれないし、絵本は若い女性、原画は芸術的絵画、美術館はたくさん訪問客が町にやってくるなどと勝手な発想をひろげ、突き進むことになるのでした。

絵本で飯が喰えるか？

文化での町おこしなんてできるはずがないと言われ、資金もなく、町からの補助も難しいときでした。ところが昭和63年は、竹下内閣の政策として「ふるさと創生資金」1億円事業が全国で始まることになったのでした。これに目をつけた仲間の一人は、早速、当時の町長に掛け合つたのでした。町長は、「君たちの考えは理解しないわけではないが、突然言われても「ハイ」とは答えられない。どのような活動ができるか仲間を増やし、町民の理解を得て欲しい」というものでした。

確かにそのとおりであった。1億円を海のものとも山のものともわからないプロジェクトに対して注ぎ込むことは、町として困惑するのが当然でした。結果、300人ほどの会員を募り、「けんがく絵本の里を創ろう会」を設立し、再度、町に申し入れを行うことになったのでした。



▲絵本キャラバンカーを利用した読み聞かせ



▲絵本の里大賞受賞作家による特別授業

町は、地域づくりとして、この1億円の約半分を使うことを英断し、活動の拠点整備として、昭和19年建設の旧役場庁舎を改装、日本一の絵本図書館を目指して絵本1万冊を購入し、初代の「絵本の館」を平成3年にオープンすることになったのでした。

この時点で、まだ確実性のない絵本による町おこしは、行政が手を染めることなく自主的な民間活動に委ねられることになっていくのでした。

「お金は出すが、口は出さない」と



▶美術館的な要素も兼ね備えた絵本の館。たまご型ドームに置かれた「木の砂場」には10万個の木の玉が入っている。

行政の財源的な支援が決まり、活動拠点もでき、進めることになるわけですが、町民の中には「絵本で飯が喰えるか。」と批判的な人達もあらわれ、このことで善し悪しは別に一躍注目を浴びることになりました。「絵本の里を創ろう会」の仲間たちはめげず、絵本原画展、絵本作家・編集者等の講演会、絵本関係図書館行事への参加等、矢継ぎ早に活動の場を広げていくことになっていくのでした。

絵本をキーワードに町づくり

スポット的なイベントとして原画展や講演会を開催してきましたが、町づくりを考えたとき、定期的開催されるイベントが必要な事に気づくのでした。

展示期間中に絵本の館を訪問された方の投票数で決定するのはどうだろう。投票だけには来てもらえないから、同時に原画展を開催しよう。等々考えて読者が投票で選ぶ絵本のコンクール、「けんぶち絵本の里大賞」を創設することになりました。今では回を重ね22回にもなります。

平成2年には、絵本の里づくりに参加していた農家の仲間達から身体に良い農産物を作付けしようと、「頭の栄

養は絵本で、身体の栄養は無農薬野菜で」と「けんぶち生命を育てる大地の会」が誕生し無農薬で安心野菜を作る組織もできました。当時としては、先駆的取り組みとして絵本の里創りとともに関心と呼ぶことになりました。

絵本原画展も例年行ってきましたが、ミニコンサート・講演会・ふるさと絵本の発刊等々、文化的なことは、臆することなく開催実施してきました。このことは、絵本の里づくりに多様性をもたらすものであり、交流人口の拡大にもつながってくるものでした。

平成16年には、老朽化した絵本の館（絵本図書館）を新築移転することになり現在に至っています。蔵書は絵本3万5千冊、児童書を含めた一般書1万5千冊、収蔵絵本原画1千点にもなります。社会福祉法人が運営する軽食喫茶店もあり、知的障がい者の働く場所にもなっています。また、ギャラリーも備えており、夏の絵本原画展等美術館的要素も兼ね備えています。

絵本の里づくりは、行動力のある男性が主体となって活動が始まっている事もあり、より前向きな活動になっていったのではないかと考えます。各家庭の書棚には、作家のサイン入り絵本があるようになり、それぞれの家庭や子供たちが読み聞かせを通じて心豊か



▲「けんぶち絵本の里大賞」投票の様子

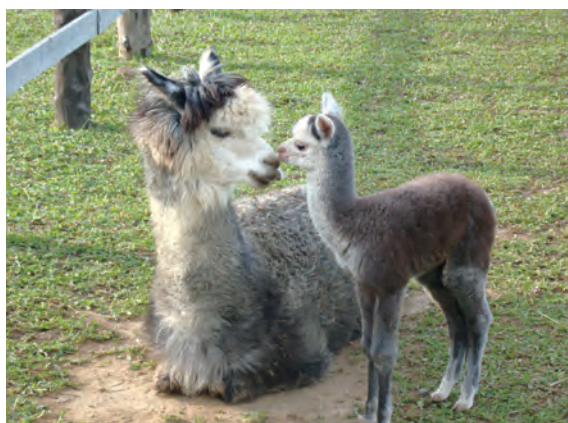


▲絵本原画展の様子

▶ スキー場跡地を活用したアルパカ牧場



▶ アルパカ



に育んでいます。

絵本といえば、女性や子ども達を対象に考えられますが、大人になっても読みたい本があったり、生きる力をつけるヒントがあったりと、心に響く一冊があります。

絵本が結ぶ子育てサイクルと絆!!

26年間の時間の流れは、当時の女子小中学生がお母さんになり、子供さんを連れてやってきます。「オジサン、覚えていますか」と、ちよっぴり高校生当時の面影を見せながら、絵本の館

で子どもさんに絵本を読んであげたり、遊ばせたりする姿がほほえましく伝わってきます。

町では、平成19年から「君の椅子」プロジェクトへの参加を進め、「生まれてくれてありがとう。君の居場所はこちらにあるからね。」とたくさんの思い出を絵本とともに未来へ椅子が運んでくれます。

絵本の館では、子育てが一段落した大人たちが癒しの思いで時間を過ごしたり、仕事漬けの日常を離れ「ほっこりとした空間に身を置く方々もたくさん訪れています。もちろん、お孫さんと一緒にの方もいらっしゃいます。遠く

◀ ペルー訪問団(右6人)とペルー日系人協会の皆さん



て数年に一度しか訪れる事ができない方も剣淵を「心のふるさと」として大切に思っていたいただいています。

絵本の持つやさしさをキーワードにした時、剣淵に合う動物を飼いたいと「アルパカ」がやってきたり、そのアルパカが「ペルー」と交流するきっかけづくりになり、平成23年7月には、日本で初めてペルーとの自治体間で姉妹都市締結もすることになりました。平成24年、6月には姉妹都市でありますペルー共和国フニン県タルマ郡パルカマヨ区を訪れ、佐々木町長他5名のペルー国訪問団が交流を深めてきました。

た。

また、絵本の魅力と子ども達を引きつける絵本の力に圧倒され、感動した映画俳優大地康雄氏が剣淵を素材とし、企画立案した心に「じんじん」と響く映画製作をしたいとロケ地になりました。絵本の里づくりは地域だけではなく全国からの「心のふるさと」となつて絆で結ばれつつあります。

誰しも眠る前、いつも母や父が読んでくれる絵本にワクワクしていたころ、小さな体には、かかえきれないほどの夢や冒険のある世界が広がっていたと思います。そんな、あの日が遠くなつたと感じたら、再び剣淵へいらしてください。大人になって忘れかけていた、少年少女時代大切な物がきつと見つかります。

剣淵町長 早坂 純夫
(平成25年12月19日就任)

※絵本が結ぶ親子の絆が映画になりました。ユーモアあり涙ありの感動する映画『じんじん』2013年4月に公開され、全国、海外で上映されています。

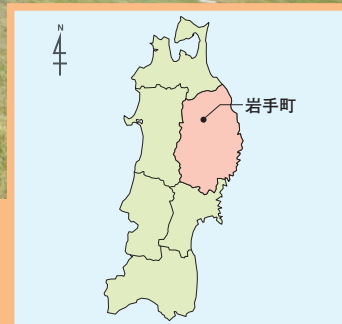
お問合わせ先

TEL 0165(34)2121 (剣淵町役場)

(平成24年12月10日付第2822号)



いわて まち
岩手県 岩手町



岩手町が誇る文化的な 風土と豊かな食材 〜芸術と野菜総合産地の発信拠点・道の駅「石神の丘」〜

豊かな自然に包まれた町

岩手町は、岩手県の中中部から北部に位置する、人口約1万5千人の町です。人間が健康的で文化的な生活を営む上で最も適しているといわれる北緯40度線上に位置し、県都盛岡市の中心部からは北へ30km。国道4号と東北新幹線、IGRいわて銀河鉄道が南北に貫き、町の交通体系の主軸を形成しています。また、東部には国道281号が陸中海岸へ連結。西部には主要地方道岩手平舘線、県道岩手大更線が八幡平市へと続き、東北自動車道西根IC、松尾八幡平ICへ連結するなど、鉄道・自動車両面で高速交通網の利便性が高く、県の北部における重要な交通ネットワークを形成しています。

町の総面積360・55km²のうち、約76%が山林・原野となっており、緑と広い空を感じられる豊かな自然に包ま

れています。地勢は、南東から北西にほぼひし型に広がり、東部を走る北上山地は全般に複雑で東西に高く、西北に低い様相をなしています。西部には盆地状の一方井地区があり、北部と西部ではその地形の違いから異なった趣を見せています。

『石神の丘美術館』の誕生

岩手町には、早くから芸術の情熱を醸成する文化的風土がみなぎっていました。昭和32年、故齋藤忠誠氏を中心に岩手町在住者を主体とした美術集団「エコール・ド・エヌ」が結成。岩手町から盛岡、東京、韓国、パリなどにも発表の場を広げるなど充実した活動が行われていました。

昭和48年からは町特産の黒御影石を主材に「岩手町国際石彫シンポジウム」を開催し、世界各国から石彫作家を迎えました。作家たちは約2カ月間

ご当地キャラクター



「たまなぼうや」(左)と
「ブルベリーナ」(右)

にわたり町内に滞在し、ワークショップなどで町民と交流を深めながら作品を制作。制作された作品は町に寄贈され、町役場庁舎前の石彫公園や町内の公共施設などに設置されました。その作品数は130点を超え、「彫刻によるまちづくり」の礎になっています。

人々の心に語りかけるような作品を制作する作家たちの情熱と、その志を支える町民。そのような文化の薫り高いまちづくりが背景になって、平成5年に野外彫刻美術館「石神の丘美術館」が誕生しました。石神山の緩やかな傾斜に開かれた美術館を歩けば、季節を追って咲く山野草が笑顔を見せ、自然の中でさまざまな彫刻がやさしく語りかけてきます。

地域の風が行き交う美術館

平成14年7月には、美術館に隣接する道の駅「石神の丘」が完成しました。これを機に美術館も常設展や企画展ができるギャラリーと創作活動を体験できる工房などを整備しリニューアル。全国的にも珍しい、道の駅併設の美術館として生まれ変わりました。

リニューアル後の美術館は、「質の高い芸術文化の発信拠点」、「町民が美

術に親しむ場」をテーマに、博物館、資料館としての役割も担うなど幅広く活動を展開。岩手町出身の作家や岩手県にゆかりの作家の展覧会を開くとともに、岩手町埋蔵文化財展、町の小中学生や高校生の作品展を毎年開催するほか、コンサートやワークショップなどを開き、美術に限らず音楽など広い芸術領域に触れられる機会を創出しています。

より地域に根差し芸術文化を発信する美術館を町民も一体になって盛り立てます。美術館のサポーター「石神の丘美術館友の会」は、屋外展示場の清掃や植栽などをボランティアで実施。また、町内の茶道愛好者が野点の会を開くなど、石神の丘美術館は、地域の風が行き交う美術館として、豊かな未来づくりの拠点になっています。

芸術との出会いを予感させる『アートロード』

平成14年12月には、東北新幹線盛岡―八戸間が開通。本町のいわて沼宮内駅―東京駅が最短で3時間弱で結ばれるようになりました。

このいわて沼宮内駅から「石神の丘美術館」までの歩道などには、彫刻

や休憩用のベンチなどを配した「アートロード」が整備され、道行く人々の癒しの空間となっています。

いわて沼宮内駅に降り立ち、駅前の広場に出ると真っ先に目に飛び込んでくるのが高さ8mの石彫「ウォーター・マーク」です。岩手町を源泉とする東北一の大河・北上川その北上川の四季を石柱の四面に表現し、石柱を取り囲む二つの壁は、奥羽山脈と北上高地を象徴しています。豊かな山々から自然の恩恵を一身



①作品名「ウォーター・マーク」
雄大な北上川の流れを表現する岩手町のシンボルモニュメントは、アートロードの起点として人々を迎えます。

アートロードの石彫作品



②作品名「名犬シナモン」
岩手町をロケ地として撮影された福祉映画「ホーム・スイートホーム」に出演する「シナモン」がモデル。



③作品名「ニホンカモシカ」
自然豊かな町内に多数生息する「ニホンカモシカ」は、眼下の「北上川」の悠久の流れを見つめ、石の上にたたずんでいます。



▲道の駅「石神の丘」は、産直施設、レストラン、農産加工施設などを備えるほか、併設する「石神の丘美術館」との相乗効果で、連日多くのお客様でにぎわいます。

に集めて太平洋に注ぐ、北上川の雄大なスケールと千変万化する水の表情を表現した作品です。岩手町のシンボルモニュメントとして堂々とそびえ立ち、駅に降りた人々を迎えています。

このウォーター・マークを起点に、石神の丘まで約800mの道のりにたまたむ動物たちの彫刻は、美術館までの道しるべになるとともに、人々を

アートの世界へいざない、素晴らしい芸術との出会いを予感させてくれます。美術館に隣接する道の駅「石神の丘」は、平成14年7月24日にオープンし、平成24年には10周年を迎えました。青森から東京を縦貫する東北の大動脈・国道4号に直結する同駅は、駐車場や道路休憩施設としての役割はもてるること、岩手町の物産観光を発信

する拠点として大きな役割を果たしています。美術館との相乗効果もあり、町内外からの来場者数は、開業以来10年で420万人を超えました。

同駅の産地直売施設に入ると、自然光が差し込む明るい店内に、色とりどりの農畜産物が並んでいます。これらはすべてが岩手町産です。町の主要産業である農業では、町内の畜産農家と耕種農

家が連携して堆肥などを循環活用し、地域内の資源の活用と環境に優しい農業を実現する「耕畜連携」を推進。特産キャベツ「いわて春みどり」を筆頭に、レタス、ホウレンソウ、ピーマン、ダイコン、ナガイモなどが栽培面積県内トップクラスを誇り、岩手町は全国有数の「野菜総合産地」としてPRしています。産直施設の利用者は、今朝畑で収穫された新鮮な野菜類が所せましと並ぶ店内に、野菜総合産地・岩手町の姿を感じることができるでしょう。これら豊かな町産食材は同駅のレストランと農産加工施設の「茶屋っこ」で味わうことができます。地産地消2



④作品名「いわてレッドデータブック」
岩手県内に生息する希少な野生生物のリスト「いわてレッドデータブック」から、ほ乳類26種を石の引き出しにしまひこんでいます。

⑤作品名「トウホクノウサギ」
伸び上って遠くを探すような仕草が愛らしい「ノウサギ」は石神の丘美術館入口付近で訪問者を歓迎します。

つ星の「レストラン石神の丘」では、季節ごとに変わるコース料理をはじめ、「春みどりラーメン」や「石神長いもそば」、「ブルーベリーカレー」など、町の特産品を使用した特色ある多彩なメニューを提供します。一方、「茶屋っこ」では、農産加工組合員が真心を込めて手作りした、懐かしい母の味と手打ちの十割そばが人気。ご当地ソフトクリーム「春みどりソフト」はご当地の限定品です。また、産直施設、レストラン、農産物加工施設が三方を囲む中央の広場では各種イベントが開かれ、町内外の人と人が交流する場所になっています。

道の駅「石神の丘」は、岩手町の情報発信と交流の拠点です。岩手町に来たら、ぜひ、お立ち寄りください。

さらなる発信を目指す『ベジパウダー』

産直施設や地産地消のレストランなどを通じて、野菜総合産地・岩手町を発信し、町の農業振興につなげようとする取り組みの「石神の丘」の取り組みの一つに、「農家応援プロジェクト商品」があります。

商品は、キャベツ焼酎「キャベ酎」、石神長いもそば、「ブルーベリーカレー」、ブルーベリーリキュール「石神の恋ごころ」の4つ。いずれも岩手町産の原料を使用した石神の丘のオリジナル商品です。このうちの「キャベ酎」は、道の駅「石神の丘」開業10周



▶石神の丘オリジナル商品は、岩手町の農産物を原料に使用した「農家応援プロジェクト商品」です。



年を記念し、プレミアム版を限定発売しました。「北緯40度のまち」にちなみ、アルコール分を40%にしたプレミアム版「キャベ酎」は、その名も「甘藍酎」。「甘藍」とはキャベツの和名です。キャベツ産地として100年の歴史があり、かつて南部甘藍というブランドのキャベツを擁し、日本一の産地として栄えた岩手町の歴史がパッケージに表現されています。

さらに、野菜の加工による六次産業化をテーマにした「いわてまち石神の丘美食品工房プロジェクト」が動き出しました。このプロジェクトは、岩手町産野菜をドライ加工した食材「ベジパウダー」を製造して付加価値を高め、レストランのメニューや農産加工

品に活用して彩り豊かなご当地商品を開発しようとするものです。「生産」「加工」「流通販売」の機能をすべて備える道の駅「石神の丘」ならではの六次産業化の取り組みとして大きな期待が寄せられています。これにより野菜総合産地・岩手町のさらなる発信を目指します。



▲▶野菜の付加価値を高める「ベジパウダー」。彩り豊かなご当地商品を開発しようとさまざまな試作品が作られ、市販化されています。



「ベジパウダー」は発売以来好評を博しており、パウダーを使った商品やメニューの開発も進行中。新たな岩手町名物が次々と誕生しています。

企画商工課 佐藤 亘
(平成25年3月25日付第2834号)

健康長寿の町「おがの」をめぐって 花と歌舞伎と名水のまち



おがのまち 埼玉県 小鹿野町



小鹿野町の概要

小鹿野町は埼玉県の西北部に位置し、東は「秩父夜祭り」で知られる秩父市と、西は群馬県の神流町かんなまちに接しています。

古くは、江戸と信州を結ぶ重要な街道の宿場町として栄え、埼玉県内では「川越」に次いで2番目に「町」として町制を施行しました。江戸との交流が盛んであったことから、様々な影響を受けながら独自の文化が育まれ、祭りや伝統芸能が今に引き継がれています。特に、「町じゅうが役者」と言われる農村歌舞伎の「小鹿野歌舞伎」は、二百数十年の伝統をもち、「歌舞伎のまち・おがの」としても知られています。また、日本百名山のひとつ「両神山」や平成の名水百選の「毘沙門水」、日本の滝百選の「丸神の滝」、と多くの百選があり、カタクリや日本一の園

地を誇るセツブンソウ自生地があるなど四季折々に花咲く、美しく豊かな自然に恵まれた町です。

平成17年10月に隣接する両神村と合併し、現在に至っていますが、合併後の面積は約171km²、人口は13,157人（平成25年4月1日現在）で高齢化率は30・2%、75歳以上は17・3%という状況です。特に山間の小集落は高い高齢化率を示しており、町内の66行政区のうち、8つの行政区が「限界集落」と言われています。しかし、鉄道も無い、山あいの町ですが、後期高齢者の一人当たりの医療費は埼玉県内で1番少ない、なかなか元気な町です。これまでに小鹿野町が取り組んできたいくつかの事例から健康長寿の町「おがの」を紹介します。

小鹿野町町章



◀日本の滝百選「丸神の滝」



国保町立小鹿野中央病院

健康づくりの始まりは、昭和28年に町立病院(国保町立小鹿野中央病院)を開設したことから始まったと言えます。当時1万3千人程度の小さな町としては、先駆的とも言えることで、当初は医師5人、病床38床でスタートし、その後昭和51年に建て替え、平成14年に増築を行いました。約60年が経過した現在は、一般病床45床、療養病床50床の地域のニーズに合った、そして地

域医療の中核病院としてしっかりと根付いています。また、この町立病院は小鹿野町が取り組んでいる「保健・医療・福祉」が一体となつて機能する「地域包括ケアシステム」の重要な一翼を担っています。

健康づくりの推進

これまで、町で取り組んできた健康増進、高齢者の福祉に関する事業の一例ですが、先ず減塩運動と食生活の改善があげられます。昭和56年から10

年間、都内にある栄養専門学校の協力を得て、食生活の実態調査を行いました。昔の家庭で作るみそ汁は、塩分が多く、しょっぱかった。当時の三大疾病の一つであった「脳卒中」の死亡率が町において高かったのは事実です。集落ごとに持ち寄ったみそ汁を塩分測定し、その結果、やはり塩分がものすごく多いことが判明しました。それから、塩分を減らすように集会所に泊まり込んで指導が行われ、以後、減塩運動と生活習慣病の改善を展開しました。



▶輪投げ大会

次に、町では昭和51年より成人病予防健診(人間ドック)の助成を開始し、予防健診の必要性を啓発しました。また、町内に「成人病モデル地区」を指定して、健康増進を推進することにも、町内全地区に地域の健康増進の推進役として「保健補導員」を育成してきました。平成25年度には231名の方を委嘱しています。

昭和58年には、予防医療の拠点として厚生省(当時)の医療費削減のためのパイロット事業「ヘルスパイオニ



▶健康まつり(栄養士による料理教室)

「アタウン事業」の指定を受け、輪投げ大会などの軽運動の推進や栄養改善料理教室、行政区ごとに「健康づくり座談会」などを始めました。これらの事業は発展的に形態を変えながら現在も開催しています。第28回となる町民輪投げ大会は、平成24年10月に「健康フェスティバル」ともに行いました。毎年100チーム（1チーム3名）が出場しますが、どのチームも日頃から練習していて、場所を取らずにできるとても良い運動となっています。

このほか、要介護者世帯の全戸訪問、70歳以上の健康調査、単身高齢者の全戸訪問などを実施してきました。

地域包括ケアシステムの構築

町では、これまで町民の健康増進、高齢者の福祉に努めてきましたが、平成4年にさらに強力に保健福祉の推進を図るため、保健、医療、福祉のサービスを一体的に提供する「地域包括ケアシステム」の構築に向けて調査研究を始めました。

各地の先進事例を調査研究するとともに、既に「地域包括ケアシステム」を構築し、先進事例であった広島県御調町にある「公立みつぎ総合病院」

現在の尾道市ですが、院長の山口先生から指導を受けるなど、小鹿野町に適したシステムの構築をめざしました。

そして、平成14年に先述の町立病院の隣りに保健福祉センターを開設しました。このセンターには、町の行政組織の一つである保健福祉課を置いたほか、在宅支援センターや訪問看護ステーションも併せて設置しました。こうして、保健、福祉、医療、介護サービスの部門が、ひとつの建物内に集約できたことで、今まで以上に部門間の連携がしやすくなり「地域包括ケアシステム」が大きく前進することとなりました。また、このセンターに勤務する8人の保健師は全て町の職員で、高齢者、要介護者のお宅を訪問し、生活習慣病などの健康相談に応じ、どのような医者に診てもらったかを指導する体制が確立されました。こうして、町民（高齢者等）が訪問活動等による健康教育や健康相談などを通じて保健師などの専門職の話しを聞いたり、相談する中で無意味な通院をしなくなり、結果として、通院日数を減らす大きな効果となりました。

また、入院した方は入院する時点で、退院した時のことを考えて、関係者で協議し、例えば、どの程度 of 状況

になったら退院させ、自宅でのようなサービスをどのように提供し、支えていくかについて協議します。町立病院や在宅での介護サービスまで町が町営で提供しているところが、小鹿野町の強みであり、特色です。安心して退院できるシステムがあることが、入院日数の削減につながっているのだと思われまふ。

このほか、介護保険制度の開始時から、町が事業主体となって介護サービスを提供するとともに、地域



▶ ステップ体操

包括ケアシステムの中に介護サービスも取り込んで運用しています。

地域で輝く高齢者

町で行う保健事業は、基本的には、高齢者のみならず、町民全体を対象に行っています。老人クラブ発祥の地といわれる小鹿野町には、20の老人クラブがあります。この老人クラブは、町の健康づくり運動を支えてきた団体でもあります。老人クラブごとに町の介



▶ 小鹿野歌舞伎（屋台歌舞伎）

護予防施設である「いきいき館」に集まり、ステップ体操教室で運動したり、ゲートボール、グラウンドゴルフなど



▲町の花「セツブンソウ」

で健康づくりを行っています。

このステップ体操とは、介護予防、転倒予防、生活習慣病の予防改善、大腰筋の強化を図ることを目的に、ステップ台を用いて行う有酸素運動とストレッチング体操のことです。この体操を2名の健康運動指導士のもとに行い、こうした教室に参加する高齢者の皆さんを老人クラブごとに自宅付近まで、町のバスで送迎し、一人でも多くの方に安全に参加できる方法を取り入れています。

このほか、「いきいき館」では、元気な高齢者、自立活動可能者、特定高



▲両神山麓花の郷ダリア園

齢者の支援事業など、高齢者の介護予防事業を中心に「元気はつらつ教室」や「社交ダンス教室」を開催し、また、「健康づくり教室」では管理栄養士による料理教室やレクリエーション、参加者どつしが楽しいおしゃべりをしながら、ゆったりとした時間を過ごすなど、高齢者が楽しみながら参加しています。

そして、小鹿野町と言えば「小鹿野歌舞伎」。町民の4人に1人が役者といわれるほどです。この小鹿野歌舞伎を支えているのが、元気はつらつの高齢者の皆さんです。かなりの高齢者でも役者として演じ、中学生や高校生にも指導・伝承しています。若い世代から頼りにされていることが、皆さんの誇りといきがいにつながり、町にはこうした地域で輝いている高齢者がたくさんいるのです。

また、小鹿野町は花の名所でもあります。冬は町の花であるセツブンソウ、ロウバイ、春はカタクリ、ハナモモ、夏は花ショウブ、秋はダリアと四季折々に咲く花の姿を楽しめます。なかでも平成21年にオープンした「両神山麓花の郷ダリア園」は小鹿野町の新名所です。10,000㎡の敷地に約300種のダリアが咲き誇る光景はま

さに圧巻です。見頃は9月上旬から10月下旬ですが、平成24年は3万人を超える人が訪れました。このダリア園は、地元の高齢者の皆さんが中心となって、地域の人々の手によって作り上げたものです。

健康長寿の町をめざして

小鹿野町では、このように行政、医療部門だけでなく地域の皆さんと一緒に、なつてさまざまな事業を実施し、結果として高齢者の医療費が埼玉県内で1番低い町となりました。これは、今日まで保健、医療、福祉対策を町の重点政策に位置づけ、その基本姿勢が揺るがず努力してきた結果であります。地域の特徴を的確に捉えて実施してきた事業、それらが有機的に作用し合つて、長い年月をかけてできた成果でもあります。

まだまだ課題もありますが、私たちは、さらに事業を継続し、そして改善しながら「健康長寿の町・おがの」をめざして関係者一同、邁進していきます。

小鹿野町長 福島 弘文

(平成25年8月19日付第2850号)

もっともっと元気な町へ!!



つばたまち 石川県 津幡町



津幡町の概要

石川県の真ん中に位置する津幡町は、古くから加賀・能登・越中の交通の要衝として発展してきました。国道8号バイパス（津幡バイパス）が供用開始となった平成に入ってから、毎年1,000人規模で人口が増え続け、昭和40年代には約2万2,000人だった人口は、現在3万7,500人を数えるに至っております。近年、石川県全体の人口が年々僅かに減少する中、我が町津幡が少しずつでも増加を続けているのは、県都金沢の北側に隣接し、中心部まで車で20〜30分という条件の良さもあるうと思われ、平成23年11月、人口5万人を突破した野々市町の市制施行に伴い、石川県内では人口が最も多い町となりました。

行政エリアの面積は110.44㎦で、東部には丘陵性山地が連なっており、

津幡町町章



ご当地キャラクター



「よしなかくん」と「ともえちゃん」

森林公園や漕艇競技場

町のおよそ3分の2は中山間地域であります。西部には幅2〜3kmの平野部が広がり、県内最大の潟、河北潟に続いています。

町の中央部には国内有数の広さを誇る石川県森林公園があり、昭和58年には昭和天皇をお迎えして全国植樹祭が、また、平成6年には皇太子殿下・雅子妃殿下をお迎えして全国育樹祭が開催されました。現在も当時の全国植樹祭を記念して、毎年4月29日の昭和の日には県内各地からみどりの少年団らが集い「県民みどりの祭典」が開催されています。

一方、町西南部には日本海側最大級の規模を誇る石川県津幡漕艇競技場があります。毎年8月には多勢の町民が参加し、つばた町民レガッタ大会が開催されているほか、中学生や高校生

◀日本海側最大級の規模を誇る津幡漕艇競技場



◀俱利伽羅合戦図屏風



◀加茂遺跡から発見された加賀郡勝示札



また、町の

中心部に位置
します加茂遺
跡からは平成
12年6月、『加
賀郡勝示札(か
がくんぼうじ
ふだ)』が発見
されました。
これは平安時
代の嘉祥年間

(848

スポーツで元気な町づくり

スポーツを通じて元気な町づくりを提唱されたのは前津幡町長の村隆一氏であり、町のスポーツ振興策は成果にも表れています。

特に駅伝競技での津幡町の活躍はめざましく、石川県では平成15年から金沢市はじめ県内19の全市町が参加し、「市町対抗ふるさと駅伝」が開催されていますが、これまでの9回の大会で5回の優勝を数えています。さらに2位、3位が各1回、4位が2回と常に上位の成績を残しており、その大きな原動力となってきたのが町立の中学校陸上部なのです。とりわけ津幡南中学

の大会など各種大会で利用されています。

俱利伽羅合戦の舞台

町東部の富山県との県境には、日本三大不動のひとつと言われ、初詣を中心に多くの善男善女でにぎわう俱利伽羅不動寺があります。その近くには、源平俱利伽羅合戦の舞台となった俱利伽羅峠があります。ここは、1183

年、木曾義仲軍が数百頭の牛の角に松明をつけて平氏軍を急襲した「火牛の計」で知られ、義仲軍4万が平維盛軍7万を打ち破る舞台となりました。この俱利伽羅合戦を境に平氏は衰退の道をたどることとなり、歴史の大きな転換点となった合戦と言われています。今、我が町では木曾義仲と巴御前を主人公にした大河ドラマの誘致を、町民を挙げてNHKに要望しているところでもあります。

年(851年)の年号が刻まれており、その当時のおふれ書きであります。中には「農民は朝は(現在の時間で)午前4時には田んぼに行き、夕方は午後8時頃に家に帰るなさい。」「農民が好きなように魚、酒を食つことを禁ずる。」など8条からなり、2年前に国の重要文化財に指定されました。歴史ある我が町の一端であります。



▲県内全市町が参加する「市町対抗ふるさと駅伝」。津幡町はこれまで9回の大会で5回の優勝を飾る。

◀ 毎年夏に開催される全国選抜社会人相撲大会



れる河北潟一周駅伝競争大会は、正月の大学生の箱根駅伝を上回る回数を誇り、平成24年は92回目となる全国一、いや世界一の駅伝大会です。また夏の全国選抜社会人相撲大会は、安土桃山時代からの歴史を誇る八朔大相撲を起源としており、昭和45年に現在の姿に変わり平成24年で43回目の大会となります。毎年全国各地から精鋭が集まり、内閣総理大臣杯獲得を目指し熱戦が繰り広げられます。

これからもスポーツを通じて元気な町・津幡を発信していきたいと考えています。

農業公園で紅葉の名所

校陸上部は指導者にも恵まれ、石川県中学校駅伝では毎年上位の好成績で何度も全国大会に駒を進めています。陸上以外でも、柔道や卓球、バレーボールなどにおいても津幡、津幡南の両中学校は奮闘し、全国大会へ出場しています。

また、町内にある唯一の県立高校・津幡高校には体育科があり、バスケットボール、なぎなた、柔道、ウエイトリフティングといった競技で多くの選手を全国大会に送り出しています。

町内では歴史あるスポーツの大会も開催されています。毎年11月に行わ

だけではなく、野菜も作りたい！白菜、キャベツ、ニンジン、大根などなど。近くにはログハウス風のレストランができないだろうか？そこで採れた野菜を素材にスープを作り、米粉で作ったパンを添えて昼定食はいかがでしょうか？

そしてまわりには2,000〜3,000本の紅葉を植えたい！町民の皆様は5,000円程度の出費をしていただいで、紅葉の木オーナーになってもらいます。秋の紅葉だけではちよつとさびしいなら、夏の紫陽花もいいですね。また春の梅も農業公園の戦力になってほしい。そんな農業公園ができないか？という強い思いから生まれたものです。

そして、夢は徐々に大きくなります。真つ赤になった紅葉のポスターを東京駅のコンコースに何枚も貼り出す。そのポスターには「津幡へいらつしやい！北陸新幹線金沢駅から20分!!」皆さん！津幡へ来てください。

「科学のまち」で町おこし

「科学のまち」発信事業も津幡町の町おこしのひとつです。子どもたちから大人まで一緒に実験に参加して、科

◀ 科学の実験に取り組む子どもたち



学に強くなろうと平成23年度から町内小中学校でいろいろな行事を展開しています。科学教師のOBを嘱託職員に迎え、町、教育委員会そして現場の先生方が一体となって事業を推進しています。

平成24年度は「科学の小径（こみち）」整備に着手したいと考えています。わずか数十メートルの中でのいろいろなことが体験できるような「科学の小径」を作って、子どもたちに楽しんでもらいたいと考えています。

そしてこの「科学」を通じて石川県にユニークな町があるゾ！と県外にもアピールし、いつの日か、我が町

に修学旅行の児童・生徒が訪れてほしい！そして地元の子どもたちと一緒に科学の実験を楽しんでもらいたいとも考えております。夢はでっかく！この子どもたちの中から将来ノーベル賞受賞者が出ることを期待しています。

中学生海外派遣交流事業

津幡町では平成17年から中学生海外派遣交流事業を実施しています。毎年町内の10人の中学生を10日間、オーストラリアのクイーンズランド州タウンズビル市へ派遣しています。そして、現地のノーザン・ビーチーズ・ステイト・ハイスクールにお世話になり、6日間のホームステイを体験します。短い期間ではありますが、参加した中学生みんなが満足感いっぱい帰国している姿を見てうれしく思います。

また、このハイスクールとは将来的に姉妹校の提携をすることとしています。

町民の安全・安心！

平成23年の東日本大震災で、私たちは自然災害の恐さを改めて知りました。

津幡町では、これまで隣接する金沢市、河北郡内灘町、かほく市、それに富山県小矢部市との間で災害時相互応援協定を締結してありました。しかし、あつてはならないことではあります。万が一大きな災害が発生すれば、被害が出るのは周りの市町も同じであります。

このため、福岡県遠賀郡岡垣町との間で災害時相互応援協定を締結することとなり、平成24年3月23日、岡垣町で宮内實生町長との間で調印を行いました。

◀ 福岡県岡垣町と災害時の相互応援協定を締結



ました。ちなみに岡垣町までは、直線で640kmあります。

町民の安全、安心、そして福祉の向上が私たちに与えられた大きな仕事であります。その中には、子どもたちに夢を与える教育をすることも入ります。また、若い人たちに雇用の機会を創出するための企業誘致も大事な仕事です。景気が低迷し続ける中、多くの難題を持ちつつ、住んでよかったと実感できる、町づくりに邁進したいと考えています。

津幡町長 矢田 富郎

(平成24年5月21日付第2800号)

▶ 毎年10人の中学生をオーストラリアに派遣。タウンズビルにて





と う ご う ち ょ う
愛知県 東郷町



子育て支援ナンバーワンでまちづくり

水と緑とボートのまち

東郷町は、愛知県の尾張東部地域に位置し、明治39年に尾張の「東のふるさと」という意味で「東郷村」として誕生しました。以来昭和45年の町制施行を経て現在に至るまで100年以上の歴史があります。

面積は18・03km²と小さな町で、尾張と三河の境となる境川流域の豊かな水辺や緑を有する農業のまちとして栄えてきましたが、名古屋市と豊田市の間に位置する地理的条件に恵まれ、高度成長期以降は両市の発展と共に絶好のベッドタウンとして発展し、人口は4万2千人余を数えるようになり、現在も着実に増え続けています。

現在は、周辺を全て「市」に囲まれた一郡一町で、小さくてもキラリと光る「住んでよかったといえるまち」

を目指し、住民と協働のまちづくりを進めています。そして、その実現のために、公募により集まった町民と町の職員で構成する検討委員会において、約2年をかけて条例素案の検討・作成を行い、平成25年6月に「東郷町自治基本条例」を制定しました。

また、東郷町には、50年前に開通した木曽御岳を水源とする愛知用水の中間調整池で、総貯水量900万トンの愛知池があります。ここには、愛知県では唯一の1,000mコースを7レーン有する公認ボート競技場があり、多くの全国規模の大会が開催されています。

東郷町はこの特色を活かして、選手寿命の長いボート競技を「町の生涯スポーツ」と位置づけ、町民の健康づくりを図りながらレガッタ（ボート大会）を開催して町民交流の場として活用しています。

ご当地キャラクター



「トッピー」

▶愛知池全景



◀毎年8月に愛知池で開催される「町民レガッタ」



まちづくりではキラリと光る三つの柱として、「子育て支援」、「健康づくり」、「賑わいづくり」を掲げて取り組んでいます。とりわけ、まちの将来を担う子どもたちが健やかに成長できるよう「子育てするなら東郷町」をキーワードに、子育て支援ナンバーワンのまちを目指して、様々な施策を展開してまちづくりを進めていますので、その代表的な取り組みをレポートします。

子育て支援ナンバーワンを目指して

1. 安全・安心な居場所づくり、放課後子ども教室

小学校に通う児童に、放課後の安全・安心な居場所を提供するため、子どもにとって最も身近な学校施設を利用した「放課後子ども教室」を平成20年10月に開設、その後、3教室を開設し、現在は6小学校のうち4校で実施していますが、将来は全校で実施する計画です。

この放課後子ども教室は学校の余裕教室を利用し、授業のある日は授業後から午後5時30分まで、授業のない日は午前9時から午後5時まで、お盆、

年末年始、学校行事などでの閉所を除いて平日はほぼ開所しており、年間約220日間運営しています。

運営は学校とは全く切り離し、生涯学習課の指導員と地域のボランティアの方々で行われています。活動は「学び・遊び・体験・ふれあい」の四つに分類され、「学び」の時間では、授業のある日は一日30分、授業のない日は60分の学習タイムを設け自主学習を支援しています。

「遊び」の時間では、室内遊びや校



▶放課後子ども教室
指導員による本の読み聞かせ

庭でドッジボールなどを行い、「体験」の時間では、主に地域の方々に講師をお願いし、お茶の作法やクッキングを楽しむなど普段体験できない活動を行っています。

また「ふれあい」の時間では、地域の方々と学校の近隣を散策して自然観察をしたり、児童館で活動している放課後児童クラブと交流を図るなど、教室外での活動も活発に行っています。そのほか季節に合わせたイベントや遊びの大会を開催し、現場の指導員が話し合っ

て児童の興味、関心を引き出しています。これらの活動には、主に1年生から3年生の児童が参加し、異学年や地域の方々との交流を深めています。

教室の運営に当たる指導員は、子どもの参加票や教室だよりで保護者と情報共有を、また活動日誌を使って指導員間で子どもの情報を共有しています。学校側とは、定期的に連絡を取り参加児童の情報を提供すると共に、学校行事や利用施設の確認などスムーズな運営に努めています。

2. 文部科学大臣表彰のダブル受賞

平成24年12月には、こつした地域を巻き込んだ「放課後子ども教室」の活動が特に優れていると認められ、兵庫小学校の放課後子ども教室が、地域による学校支援活動推進にかかる文部科学大臣表彰を受賞しました。

また、諸輪中学校PTAの活動も高く評価され優秀PTAとして、文部科学大臣表彰を受賞するというダブル受賞の栄誉に浴しました。



▶ 放課後子ども教室 自主学習風景

3. 更に充実させる今後の取り組み

今後は更に活動内容を充実させ、各放課後子ども教室の特色を出すため、指導員には、子どもに対する対応力の向上を目的とした研修への参加を、保護者には放課後子ども教室の運営に積極的な協力を求めていく予定です。

また、活動内容の改善充実を図る目的で、放課後子ども教室のコーディネーター、自治会長、学校代表、PTA代表、町社会教育指導員を構成員と



▶ 中部児童館全景

する運営連絡会で当該年度の事業検証と評価をして、次年度の事業計画への反映を図っていきます。

4. もう一つの安全・安心な居場所づくり放課後児童クラブ

東郷町には、全ての小学校の近くに児童館を配置していますが、全6館で「放課後児童クラブ」を、前述の「放課後子ども教室」に先駆けて開設しています。ここでは主に小学生の低学年（小学校3年生まで）を対象に、日曜日を除く毎日、午後7時まで遊びを中心に子どもたちを預かっていますが、当然、地域の皆さんのボランティア活動の協力を得て運営しています。

充実した東郷町の子育て支援

1. 子ども医療費と不妊治療費の助成

子ども医療費は、平成24年1月から助成の対象を拡大し、入院・通院とも18歳まで所得制限なしで無料としています。これは、愛知県では初めてのことで子育て中の皆さんから大変感謝されています。

そして平成25年3月からは、既に実施している県内トップクラスの不妊治療費助成制度に加え、不育症治療費助成制度も愛知県内で初めて実施しています。

2. 安心子育てへの様々な支援

病気や病気回復中の、生後6か月から小学校3年生までの子どもを預かる「病児・病後児保育」では、働く親を支援しています。また、核家族化と社会環境の変化で要望の強い「一時保育」を保育園とは別に運営しています。そのほか親子の交流、子育て相談ができる「子育て支援センター」、町内外を問わず親子で遊べる「つどいの広場」を運営しており、つどいの広場の一角では、短時間の一時保育も行っています。また、保育園の送迎や家庭で一時的に子どもを預かる「とくごうファミリー・サポート」など、安心して子育てができる環境を整備しています。

3. 子育て不安を解消する、子育て支援力ワンセラー

子育て支援を進めるにあたって、財政支援や環境整備はもとより、心の通った子育て支援をより重視しています。子育て相談員として、子育て支援カウンセラーを子育て支援課に2名配し、子育てに不安を抱える家庭をサポートしています。主な事業として「5歳児すくすく発達相談」「子ども相談」などを実施しています。



▶コーディネーショントレーニング

4. 東郷町独自の5歳児すくすく発達相談

「5歳児すくすく発達相談」は、町内の保育園や幼稚園に通う5歳児を対象に、臨床心理士や発達障がい支援指導員等の発達支援スタッフと各園を回り、保護者へのアンケート等を基に、行動観察を実施しています。発達の気になる子どもには発達検査を実施して、子どもの個性を確認し、必要な支援を保護者に提案するとともに、就学に向けて、早期に小学校との連携を図っています。



▶「納涼まつり」での東郷音頭

きます。この取り組みは東郷町独自のシステムです。

文科省に認められた、幼児期の体力づくり

現在、町内にある8つの保育園では、幼児期に必要な多様な身体の動きや体力、運動能力の基礎を楽しく習得できるよう、先進的な「運動遊び」に取り組んでいます。この運動は、多様な動きの経験を通して、リズム感やバランス感覚など、身体の部位を調整して滑らかに効率よく動かす「コーディネーション能力」の向上に視点を置いています。

この先進的な取り組みが評価され、昨年、文部科学省が推進する「幼児期の運動促進に関する普及啓発事業」の調査研究の対象事業に採択されました。

「東郷音頭」でふるさとの想をこめよう

民謡「東郷音頭」は豊かな東郷町を謡いこんだもので、盆踊りなど多くの町民に愛されています。

子どもたちが将来、ふるさと東郷

を誇りに思えるよう「ふるさと意識」の醸成を図るために保育園で4歳と5歳児を対象に、民謡「東郷音頭」の歌と踊りを教えています。園児と指導している東郷音頭保存会の皆さんとのふれあいが深まるとともに、地域の盆踊り大会も大変活性化しました。

今後の取り組み、子どもの権利条例

全ての子どもたちが、安全で安心して健やかに成長することができる町を実現するため「子どもの権利に関する条例」の制定に向けて準備を進めており、今年度中の条例制定を目指しています。今後も、子ども・子育て支援法の施行に伴う子育て環境の整備に努めつつ、子育て支援に関する住民ニーズの把握に努め、事業の拡充を図り、『子育てするなら東郷町』のフレーズが、さらに世間で定着するよう意欲的に進めていきます。

東郷町長 川瀬 雅喜
(平成25年9月23日付第2854号)

▼毎年2月11日、12日に開催される田峰観音大祭(奉納歌舞伎は12日)

現 地 レ ポ ー ト

田^だ峰^{みね}観音奉納歌舞伎の 保存と田峯小学校 引き継がれる伝統芸能



し た ら ち ょ う
愛知県 設楽町

自然豊富な設楽町

設楽町は、愛知県の北東部、三河山間地域に位置する北設楽郡に属し、東は東栄町、豊根村、西は豊田市、南は新城市、北は長野県根羽村と隣接しています。人口約5、900人、高齢化率は40%を超える過疎の町で、総面積273・96km²の約90%を森林が占め、豊川、矢作川、天竜川という三大水系の水源の町となっています。

1、000m級の山々が連なり、杉、ひのきの山々の中に新緑、紅葉を奏でる木々が多くあり四季折々の美しさを楽しむことができます。また、アマゴやアユなどの釣りシーズンには寒狭川(豊川)には多くの太公望が訪れ、釣果を競い合います。
交通は、国道257号、420号、

ご当地キャラクター



「とましーなちゃん」

473号の3本の国道を基本に、道路整備が進められています。自動車社会の進む中、北設楽郡3町村をネットワークする「おでかけ北設」というコミュニティバスを運行しています。町村域を越え相互乗り入れをするというめずらしい運行体系をとり、児童生徒、高齢者など交通弱者のための生活の利便を図っています。

田^だ峰^{みね}観音奉納歌舞伎の誕生

田峰観音は、田峯小学校校歌にも♪緑の城址 夢が淵 田峰観音名も高く♪と歌われ、地元では「かんのんさま」と呼ばれ親しまれています。

毎年2月11日と12日には田峰観音大祭が行われ、11日は田峯田楽(国重要無形民俗文化財)、12日は地元「谷高座」による歌舞伎が奉納され、県内

はもとより、県外、海外からも観光客が訪れます。

奉納歌舞伎は、90戸約300人の田峯地区に残っている伝統芸能です。奉納歌舞伎のきっかけとして、次のような霊験伝説があります。

『徳川4代将軍家綱の時代、田峯の日光寺が火災に遭い、その再建のために村人達が当時天領であった段戸山に

入り誤って木を伐採してしまった。その話を耳にした御油赤坂の代官が検分

にくることにになり、村人達は過ちを悔い、観音様に「村が3軒になるまで歌舞伎を奉納します」と願いをかけた。検分当日、旧暦の6月の土用というのに

雪が降り、代官は「こんな寒いところに木を伐りに来るはずがない」と引き返し、田峯は1人の罪人も出さずにす

んだ。その後、毎年、歌舞伎を奉納することになった。』

以降、300年以上にわたり、太平洋戦争中も途切れることなく、奉納歌舞伎は続けられています。

奉納歌舞伎の保存と 田峯小学校

「谷高座」の座員は、

地元または田峯にゆかりのある青年が担っていますが、進む過疎化に抵抗することはできず後継者育成が大きな課題となってきました。そのため、「谷高座」は、昭和50年代前半、田峯地区唯一の学校、田峯小学校に話を持ち込み、その担い手に小学生を見出しました。それまでの歌舞伎には関係者の子どもが子役として出演することはありませんでしたが、小

◀田峯小学校の子供達による「白波五人男」



学校のすべての児童を対象としたことは画期的でした。以来、小学生による子ども歌舞伎が1幕から2幕、毎年上演され、人気を集めています。

小学生の頃から地元の伝統芸能「歌舞伎」に関わっていくことで、伝統芸能を守っていくという意識が醸成されており、成人になって仕事の関係で他町村に住んでも祭りには帰ってきて歌舞伎を演じる若者もいます。また、田峯地区に住んでいる若者たちは、自分の子ども達に自分が過ごしてきた時



▶「田峰観音」谷高山高勝寺



▶素人歌舞伎では珍しい「土蜘蛛」

間と同じように、指導者と立場を変えて歌舞伎の伝承をおこなっています。

奉納歌舞伎の広がり

地元の田峯小学校には、戦前に、国際協調の精神を育てることを目的にアメリカから贈られた青い目の人形「グ

レース」が現存しています。人形の追跡調査の結果、アメリカ合衆国オハイオ州デイトン市の学校から贈られてきたと判明し、昭和63年に田峯地区を挙げてこの人形の還暦祝いをおこない、これを契機にデイトン市に働きかけ「青い目の人形」を通じた草の根交流が始まりました。

平成2年には「青い目の人形アメリカ合衆国訪問」が始まり、青い目の人形「グレース」を里帰りさせるとともに、アメリカにおいて子ども歌舞伎を演じる他、現地の小学校への体験入学、ホームステイなどがおこなわれています。

この訪問は、3年に1度のペースで、これまでに8回おこなわれていますが、田峯小学校の児童たちがアメリカを訪問するだけでなく、アメリカの子どもたちも田峯地区を訪問し、交流が深められています。

これらの交流に対する行政からの資金的支援はなく、すべて田峯小学校PTAが休日を返上し、肥料となる牛糞詰めなどの作業を通じて地道に資金確保をおこない、今日まで20年以上交流を続けています。



◀アメリカ合衆国で演じられた子ども歌舞伎

「谷高座」と地域のかかわり

「谷高座」の活動は、歌舞伎の伝承や国際交流にとどまらず、イターンによる地域定住人口の増加にまで及んでいます。

平成10年に「谷高座」の活動に大きく影響する田峯小学校の存続について、地域の人々が検討をしていく中で



▶現地小学校で記念撮影



▶体験入学の様子

◀「菅原伝授手習鑑 寺子屋の場」
すげわでんじゅて ならひがみ



「子育て中の若い家庭を対象にして、新しい宅地を開発し、設楽町、特に田峯地区への永住者を募る」ということとなり、地域の合意を得て、田峯区を挙げての一大事業として取り組むこととなりました。

平成10年8月に田峯小学校PTAを中心とした「田峯21世紀委員会」を

立ち上げ、この委員会を中心に具体的な検討が進められ、平成11年には用地交渉や測量に入り、平成12年7月には造成工事が始まりました。

当初は、宅地造成はしたものの応募者があるのだからかという不安のほろが強かったのですが、地域の小学校が少子化に伴う学校統合にならないようにと、地域の人々による小学校存続のための宅地開発事業が話題となり、新聞各社にその記事が掲載されたことで問い合わせが徐々に来るようになり、平成13年5月には分譲説明会を開くことができました。現在は、開発した17区画のうち14区画に家が建ち、あと3区画を残すのみとなっています。

この宅地の完成により、実際に田峯小学校児童数は増加しており、「谷高座」による奉納歌舞伎をおした地域の結束力の強さが伺われます。

今後の課題

田峯地区においては、田峯歌舞伎という伝統芸能が大きく関与して、伝統芸能の継承と田峯小学校の存続という大きな課題を乗り越えるため、地元がまとまり若者定住に自ら取り組み、その結果、地域の活性化だけでなく、田峯小学校自体の活性化も実現している数少ない良い事例のひとつです。

また、田峯地区では、田峯を知ってもらい交流人口を増加させることを目的に、田峯の四季や伝統行事の絵はがきを作成し広く配布するため、その絵はがき用の写真を広く募集するフォトコンテストなどの新しい事業にも取り組んでいます。

設楽町には、田峯歌舞伎以外にも多くの伝統芸能があり、それぞれ親から子、子から孫へと伝えられてきました。いずれも少子化に伴う後継者不足は大きな課

題となっていますが、どの地区もそれぞれ工夫をして伝統芸能を大切に守り続けていくとしています。伝統芸能を継承しながら、地域の団結、地域の活性化につながっていくよう行政も協力していきたいと思っています。

(平成25年6月3日付第2842号)

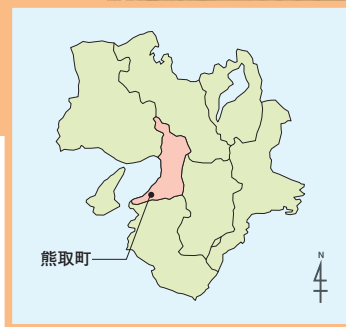
設楽町 総務課



▶芝居小屋の様子



くまとりちょう
大阪府 熊取町



子育てしやすいまちづくり 子育てを応援する人がたくさん暮らすまち

都会の利便性と豊かな自然、
両方の良さを持つ暮らしやすい町

熊取町は、大阪都心部から車で約30分、関西国際空港からは車で約15分の距離で、利便性が高く大阪南部に位置する、人口44,361人（平成26年11月末現在）のまちです。

自然環境や歴史にも恵まれ、「大阪みどりの百選」「全国水源の森百選」にも選ばれた「奥山雨山自然公園」、「全国ため池百選」に選ばれた憩いの親水空間「長池オアシス」、重要文化財「中

家住宅」「来迎寺本堂」「降井家書院」、国史跡へ指定された「土丸・雨山城跡」など見どころもたくさんあります。気候も温暖で、1970年代より宅地開発が進み、郊外の良好な住宅都市として発展してきました。

快適で暮らしやすい風土に、大阪体育大学、大阪観光大学、関西医療大学、京都大学原子炉実験所の4つの大学、全国町村ではトップクラスの36万冊（児童書13万冊含む）の蔵書を誇る図書館等「学園文化都市」としての特徴も有しています。

協働による子育て支援の礎

もともと農業と織物業を主産業とした熊取町は、女性が働くことが日常的であったことから、保育行政に力を入れてきました。現在も保育所の待機児童は「ゼロ」で、保育所が子育て支援の中心的役割を担っています。また、

ご当地キャラクター



「ジャンプ君」(左)と
「メジナちゃん」(右)



▶「学園文化都市」36万冊の蔵書を誇る図書館



▶重要文化財「中家住宅」



▶だんじり祭り



昨今の子育て事情と「ホームスタート事業」の実施

トが行われています。

(1)「待つ支援」から「届ける支援」へ

主体的な住民活動と柔軟な行政との「協働」で発展してきた子育て支援ですが、1990年代に盛んであった「子育てサークル活動」を最後に、若い世代の主体的な地域活動は縮小傾向にあります。つながることが苦手な若い世代は、次第に地域活動から遠のき、最近では、「つどいの広場」や「子育てサロン」等の子育て支援事業にさえも、足の向かない親子が少しずつ増加しています。

子どもの育ちにとって「地域社会」は重要な意味があると言われています。「地域」には「家庭」と異なる役割があり、子ども達が人間関係や社会性を身につける場として大きな意味があるのです。社会と隔絶された家庭の中だけでは、子どもは育たないのです。

な課題やニーズは、これら住民活動と協働することで発展を遂げてきました。

「新たな公共」として「協働」という概念が注目されるずっと前に、住民と行政が協力し、子育てを支援していたというのが本町の子育て支援の始まりです。主体的な住民と柔軟な行政、先人の方々の努力による「協働」が本町の子育て支援の礎であるといっても過言ではないでしょう。

現在は、午後10時までの延長保育や、小学校1年生から6年生対象の学

童保育、保育所の送迎や一時預かりなどに対する会員制の子育て援助システムである「ファミリー・サポート・センター事業」、未就園親子の居場所として「つどいの広場事業」など、多様な子育て支援が、行政とNPO等との協働で実施されています。特に「ファミリー・サポート・センター事業」においては、他自治体において育児をサポートする「協力会員」が不足する中、本町においては十分な会員数を確保しており、年間200件を超えるサポー

そこで、引きこもりがちな親子を対象に、悩みや不安を傾聴し、その成長を見守りながら、親子と社会をつなげていく子育て支援活動が必要となってきました。

「待つ支援」から「届ける支援」へ、本町の大切にしてきた「協働」を活かした新たな取り組みとして「ホームスタート事業」を実施することになりました。

(2)ホームスタート事業の実際
「ホームスタート」は、イギリスで

発祥したボランティアによる「訪問型子育て支援」です。本町では平成24年8月よりNPO法人に委託し実施しています。関西では初めての取り組みであるとともに、行政の保健・福祉分野とNPO法人の協働により、乳幼児健診や乳児家庭全戸訪問事業との連携を図り、要支援ケースについては子ども家庭相談へつなげるなど、重層的かつ継続的支援が行えている点に大きな特徴があります。

就学前の乳幼児を抱え、子育てに

不安やストレスを感じている人なら誰でも申し込むことができます。

訪問は、7日間の研修を修了した「ホームビジター」と言われるボランティアが行います。平成26年11月末現在、29名のホームビジターが登録しています。ホームビジターは週に1回、2時間程度、合計5回を目途に訪問を行い、子育ての悩みを聞いたり、一緒に家事や育児を行いながら、子育ての意欲や技術の向上を図ります。ホームビジターが週に1回、2時間程度、合

計5回を目途に訪問を行います。

また、事業全体の運営、「ホームビジター養成講座」の実施、訪問を希望する親とホームビジターとの調整などは、NPO法人ホームスタート・ジャパンにおいて子育ての専門知識に関する研修を受講し認証を受けている4名の「オーガナイザー」が行います。

平成26年11月末までに29名の申込みがあり、オーガナイザーとビジターによる訪問延べ件数は320回に上っています。

(3)利用者やホームビジターの声

利用者からは「子どもと2人きりでずっと家にいるのはしんどかった。一番つらい時期に訪問してもらって支えてもらった。」「子どもとの遊び方がわからなかったが、ビジターさんが一緒に遊んでくれたことで、子どもとの関わり方を学ぶことができた。」「下の子が生まれ、上の子に関わってやれなくなっていた。ビジターさん

▶つどいの広場



▶「ホームスタート事業」ホームビジター養成講座の様子



▶ボランティアにおける安全見守り活動



◀ ボランティアと野鳥観察する子ども達



んだ。「人との出会いを実感できる活動、自分も子育てを支えてもらったので、少しでも役に立てることがとても嬉しい。」など、活動する喜びの声がたくさん届いています。

利用者やホームビジターさんの声から、想いは必ず響き合うことを実感しています。そして「ホームスタート」から「つどいの広場」や「子育てサロン」の利用など「地域社会」との橋渡しをすることは、親と子どもが共に育ちあつたことを応援することであり、将来の子育てを応援してくれる人材を育てることもあつて考えています。

主体性の喚起、「お母さん、お父さんによる子育て応援DVDの作成」

に下の子を育ててもらい、思い切り上の子と遊ぶことができた。上の子どもが気持ちが安定したので本当にほっとしている。「子育てが落ち着いたら、自分もホームビジターとしてお手伝いしたいと思った。」など、喜びの声がたくさん届いています。

また、ホームビジターからは「お母さんの気持ちに寄り添うことの大切さを実感。特別なことをしなくても話を聞くことで問題解決になることを学

その他、子育ての当事者である親

が、楽しく地域を学び、その主体性を喚起する取り組みとして、子育て応援DVDを作成しました。撮影ボラン

ティアスタッフの指導の下、お母さん、

お父さんが様々な子育て支援事業取材し、30分のDVDを作成、現在本町

ホームページで公開しています。議論と取材を繰り返し、子育て当事者の目線でもわかりやすい作品に仕上がっていますので是非ご覧ください。またこのDVDは、本町の住民として誕生されたお子様などに、お子様の名入れ刺繍タオルセットなどとともに出産記念品として贈呈しています。
(熊取町ホームページ: <http://www.town.kumatori.jp/>)

最後に、子育てしやすいまちとは

「まち」は、そこに暮らす人々によってつくられます。

「子育てを助けてもらった経験」から「助ける経験」が世代を超えて循環し、子育てに優しい眼差しを向けられるまちであつて欲しいと思います。

子育てしやすいまちとは、地域の優しい眼差しの中で、自分らしく子育てができるまちであると考えています。

また、子どもの自立の根っこは、自己肯定感と言われています。自己肯定感とは「自分は大切な存在だ」「自分はかけがえない存在

だ」と思える心の状態を言い、その獲得には、幼少期に「ありのままの自分」を受け入れられた体験が重要であると考えられています。自己肯定感は受容と共感の中から生まれるものなのです。熊取町には受容と共感の心で子育てを応援する人々がたくさん暮らしています。今後も住民と行政の協働により「自立した人育ち」をにらみながら、地道な子育て支援活動が続けてまいります。

熊取町長 中西 誠
(平成24年12月17日付第2823号)



▶「熊取町公式facebook」平成24年11月開設
ジャンプ君(左)とメジャーナちゃん(右)

有田川町 地域交流センター「ALEC」

本のあるカフェ十まんが館＋ミュージアム博物館



あ り だ が わ ち ょ う
和歌山県 有田川町



有田川町の概要

有田川町は紀伊半島の北西部、和歌山県のほぼ中央に位置する人口約27,000人の町です。町の中央部には高野山に源流を発する有田川が西に蛇行しながら悠々と流れています。古くよりみかん栽培が盛んであり、『有田みかん』の産地としても知られております。また、粒が大きくて香りが高い『ぶどう山椒』は生産高日本一を誇ります。

町のランドマークとして…

平成21年4月、有田川町にちよつと変わった図書館のような施設をオープンさせて頂きました。それが『ALEC（アレック）』です。図書館のような施設…と表現させて頂いたのは、従来の図書館のイメージとは異なる施設だからです。ここは図書館と言うより、『本のあるカフェ』なのです。香り高い本格珈琲や紅茶などを飲みながら本が楽しめ、友達同士で会話が楽しめる、パソコンでネットもできる、そしてお腹が空けば本を横に置いてパスタやパニーニが食べられる、そんな公立では珍しい施設が『ALEC』なのです。

従来の図書館のイメージは、図書館に入るとまず目に付くのは司書の座ったカウンター。そして目を室内に移すと整然と並んだ書架、書架、書架…。そして静かに本を選ぶ人々。ずらりと並んだ書架の間には少しだけ静かに本を読み、そして調べ物をしている…そんな光景をきつと浮かべるに違いありません。

しかし、『ALEC』は違います。入口からは長く明るいエントランス。紀州材を用いたそこにはクラシック

ご当地キャラクター



「ありりん」

►憩いの場所となっている「本のあるカフェ」



カーが数台並んでいます。そしてエントランスを過ぎると広々とした空間が有りテールとイスが置かれて、前面ガラス張りの窓からはウッドデッキのテラスや芝生広場が一望できます。一見すると広いカフェのような光景なのです。隅の方には背の低い書架はあるけれど建物の空間の大部分は中央ホールです。そして、耳に入ってくるのは音楽です。有線放送でJAZZなどを流しております。お客様を眺めれば、お茶を飲みつつ仲良しグループで話している人、何やら打ち合わせのようなことをしているサラリーマン風の人々、本を読みふけている人、コミッ

ク誌を何冊も積み上げて夢中で読んでいる青年、バスタに舌鼓を打っている若い女性達、窓際の席ではパソコンを使つてなにやらレポートを書いているような学生さん…様々な人々がそれぞれのスタイルでここを利用しています。図書館とは『静かで、話をしてはいけなくところ』『館内では飲食が出来ないところ』というのが一般的なイメージですが『ALEC』は全く違います。音楽が静かに流れ、珈琲などのドリンク類やパニーニ、パスタなどの食事もある、まるで『カフェ』のような空間が『ALEC』なのです。もちろん図書館機能も併せ持っており

◀長く明るいエントランス



ますから約44,000冊の書籍、約36,000冊のマンガ（コミック誌）、そして月刊誌、週刊誌などが置かれています。専門書などの類はなく親しみやすい本が中心の施設なのです。カフェを館内に作ったり、クラシックカーなどを展示していたり、ミニ博物館を併設しているのはいろんな層のお客様に利用して頂きたいという思いからです。本好きの人が集まる場所、書籍や資料を利用するところ、それだけではなく、『憩いの場所』『お茶を飲む場所』『語らい交流する場所』『待ち合わせの場所』などにも利用できる新

►クラシックカーが並ぶミニ博物館



たなスタイルの図書館づくりに挑戦しているのが『ALEC』です。人口27,000人の小さな町ですが、アレックを訪れて頂くお客様は月平均10,000人程度となっており、町の新たなランドマークにも成っているようです。

web libralyを導入…

今回、また新たなサービスを始めました。それが『電子書籍』への対応です。近年、書籍・雑誌等の印刷媒体の売り上げは減少する一方で。平成

8年のピーク時には書籍雑誌売上は2兆6、500億円でしたが、平成23年では1兆8、000億円程度まで落ち込んでいます。ピーク時の実に68%です。このように印刷媒体は年々減少の一途を辿っているのが現状です。逆に『電子書籍』は成長著しく、平成27年度には売上は2、200億円超になると見られています。アメリカではアマゾン社の電子書籍売り上げが印刷媒体を上回りました。書籍形態や端末、そして文化の違いはありますが、アメリカではもう既にキンドルなどの爆発的な普及により電子書籍が一般化して

いると言えます。日本に於いてもケイタイ小説の台頭など若者には既に印刷媒体にこだわらないという傾向があり、電子媒体が印刷媒体と逆転する日も近いのではないかとさえ思われます。そんな現状の中、公共の図書施設としてもニーズへの対応、そして今後の図書館のあり方を考える時に、電子書籍の利便性、有効性を認め、これを積極的に活用していくことが時代への対応であるとして、新たなサービスを開始いたしました。

平成23年11月3日に和歌山県内では初の、そして町村では全国初の電子



▶町の新たなランドマークとなっている「ALECC」



▶様々な人々がそれぞれのスタイルで利用している。

書籍による図書サービスを開始いたしました。タブレット型(Tab)にも対応しております。ちなみに本格的なPC対応としては全国初の試みとなっております。

電子書籍はご利用頂く住民の皆様がインターネットを介して私どものホームページ『有田川Library』に入ってきて頂き、電子コンテンツとしての書籍をパソコン上で読み頂くというものです。要するに、インターネット接続環境とパソコンなどの端末があればどこでも利用が可能というシステムです。

さて、ここで、電子書籍を導入することによる期待される効果を挙げてみたいと思います。

- ①自宅や外出先からでも利用できる。
会社などで遅くまで働き開館時間に図書館に来られない方や、物理的に図書館まで来ることが出来ない方、また遠方の方、交通弱者の方にも利用してもらえます。IDとパスワードさえあれば、世界のごくからでも電子図書を利用できる。
- ②365日、24時間いつでも利用できる。

従来の図書館だと開館時間ではないと利用することが出来ないが、イン

ターネットを使ってアクセスするだけなので365日、24時間いつでも利用することが可能となる。

- ③音声やアニメなどデジタルならではの対応が可能。

印刷媒体であれば、例えば図鑑などでは動物の鳴き声や動きなどはわからないが電子媒体だと音や声を出すことが可能だし、図を回転させることも動画にして動きを表現することも出来る。また、障害がある方にも音声対応で読んだり、音でお知らせすることも可能。

- ④独自のコンテンツ、郷土資料などを提供できる。

町で作成した資料や広報紙、パンフレットなどの類から郷土資料までデジタル化することによって自由に閲覧することが出来、貴重な資料も電子化によって劣化しないので閉架する必要も無く誰もが閲覧できるようになる。

- ⑤返却忘れ、汚れ、そして盗難の恐れがない。

返却日は自動設定で返却忘れがなく、また電子媒体なので印刷媒体のような形のあるものではないので盗難されることもない。

以上が期待される効果です。

電子書籍には今までの印刷媒体に

出来なかったこと、そして可能性が沢山あります。デジタルデータは劣化しないので古文書などの貴重資料をデジタル化すれば閲覧することなく誰もが閲覧できるようになりますし、タイトルを付けることで検索もスムーズになり、資料整理も容易になります。絵画や図面、写真などの資料、パンフレット、チラシ類なども今まで高張つていて整理保存するのが難しかったのですが、デジタル化すれば収納場所が必要なくなり、且つ検索も容易になります。加えて、音声、動画、また立体化（3D等）にも対応できてよりリアルでわかりやすい資料となるばかりか、障害者の方への対応も可能となり、また効果音や各種言語への対応、注釈の添付や参考資料との連携も容易に図ることが出来ます。

まだまだ考えられることは無数に有り、工夫と使い方でより世界が広がるのが電子コンテンツだと考えます。全国どこの方でもフリーに閲覧できる本町ならではの特徴ある資料提供など情報の発信も含めて電子コンテンツの更なる利用形態を研究していきたいと思っています。

電子書籍は今後の図書館行政とは切っても切り離せない大きな課題である

ることは確実です。極論すれば、紙ベースはなくなり、電子コンテンツに取って代わる日もいつかやってくるかもしれません。電子書籍の登場は図書館のスタイルを大きく変えるでしょう。ただ、図書館の持つ情報の収集、資料提供という本質的且つ基本的な機能は普遍であろうと思います。私たちが早々に電子コンテンツへの対応を決めたのは今後のあり方への試金石でもあり、新しい図書館づくりへの新たな扉を開いたといつことでもあります。公共図書館に課せられた責務と社会的要請をもつ一度見つめ直し、存在意義を今一度確かめたいと考えていると思います。

平成25年11月、全国棚田（千枚田）サミットを開催…

さて、話は変わりますが、本町の代表する風景として『あらぎ島』があります。あらぎ島とは有田川の湾曲と浸食作用によってできた舌状の棚田で、大小54枚の水田が扇を開いたような独特な形をしており、その景観の美しさから、『日本の棚田百選』や第4回『美しい日本のむら景観コンテスト』農林大臣賞を受賞するなど、全国的にも高く評価されています。平成25年10

月17日には風景の国宝と言われる『重要文化的景観』にも国の方から指定を受けております。

棚田のある風景はふるさとの原風景として日本人の心の中に刻まれてきました。幾重に重なり合った棚田は豊かな自然と稲作文化を語るには欠かせないものです。このすばらしい棚田の役割を見直し、先人達の知恵を学び、そして環境保全と農村文化を考えていくのが全国棚田サミットです。

有田川町では、『人、まち、棚田ともに未来へ』と題し、平成25年11月

8日から9日にかけて全国より多くの方々をお迎えして全国棚田サミットを開催させて頂きました。このサミットを機に棚田の美しさと機能を見直す仕掛け作りも進めて参ります。

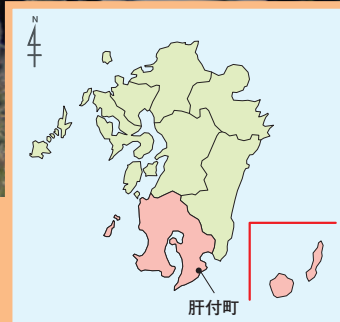
有田川町には美しい棚田、そして町のランドマークとなった『A・L・E・O』があります。有田ミカンの里だけではなく、これらもご覧いただけたらと思います。是非ともお越しください、心よりお待ち申し上げます。

有田川町教育委員会教育部長 三角 治
(平成25年1月21日付第2826号)



▶『あらぎ島イルミテラス2014』ポスター

歴史と未来が融合する町、肝付町



き も つ き ち ょ う 鹿児島県 肝付町

夢が叶う 叶岳(かのうだけ) で二〇〇〇段ウォーキング

平成24年3月26日、一〇〇〇段階段を登ろうと大勢の老若男女が集まった。一〇〇〇段階段とは、肝付町内之浦にある叶岳(標高187メートル)にこの程完成したウォーキングに最適な階段のことです。

この階段を登りきると、頂上にあるのが「叶嶽(かのうだけ)神社」です。

何と言っても名前が前向きです。よその階段を登るより、よその神社をお参りするより、夢が叶いそうじゃないですか。

おまけに、この叶岳からの内之浦湾はまさに絶景、宿泊可能な「テージ」に泊り朝日が始まるのを待つのも良い。そういえば、叶嶽神社の「叶」の文字、「ロト」に見えるのは気のせい

かな？

この何とも欲張りな場所へ一度お越しになり、一〇〇〇段階段を登って、夢を叶えてみてはいかがでしょうか！

鹿児島県で 一番元気な町になりたい。

夢が叶う町は元気であれば・・・
と言うことで、肝付町は県下一元気な町を目指して頑張っています。

本土最南端の鹿児島県大隅半島南東部に位置し、総面積は308・15km²と広大です。林野地帯・畑地帯・水田地帯に大別され、平均気温は17℃前後とても温暖で、約3000mmの雨が降ります。

山もあります。町の中央部には900m級の山々(国見岳・黒尊岳・浦与志岳)が連なります。この三山縦走は、「三岳参り」と呼ばれ、登山初心者にも人気があります。

ご当地キャラクター



「いて丸」

▶高山やぶさめ祭（10月第3日曜日）



九〇〇年の伝統、歴史の町 その時少年は神になる やぶさめ祭り

こんな肝付町は平成17年に2町（高山町と内之浦町）が合併してできました。人口は平成24年3月現在、17,362人、高齢化率36・1%と少子高齢化が進んでいます。

約九〇〇年の伝統を誇る流鏑馬は、狩衣装束に綾蘭笠、薄化粧の若者が馬上から合計9本の矢を放ち、国家安泰、悪疫退散、五穀豊穡を祈願する神事です。

毎年10月第3日曜日、会場となる

四十九所神社前の宮之馬場には、この歴史絵巻を一目見ようと大勢の観客が詰めかけます。

射手は、町内の中学2年生が務めます。勇壮華麗な本番は見る人の心を打ちますが、射手は毎年替わるため、約40日間の練習で本番を迎える少年には計り知れない重圧がのしかかります。まったく、馬に触ったことのない少年は、まず馬に慣れることから始まり、両親、友達、保存会など多くの人たちの応援に支えられ、この大役を務めます。

この本番を終えたその時こそ、14歳の少年が神になる瞬間です。

◀内之浦宇宙空間観測所



宇宙に一番近い町 そして「はやぶさ」の母港 そして『イプシロン』

内之浦宇宙空間観測所が開設されたのが昭和37年、平成24年2月には開所50周年を迎えました。

日本初の人工衛星「おおすみ」などを打上げたことで世界的にも有名です。そして、誰もが知っている小惑星探査機「はやぶさ」。平成15年5月、内之浦からM5ロケットで飛び立った「はやぶさ」は、平成17年小惑星「イトカワ」に到着。しかし、その後燃料漏れやエンジンの停止、通信途絶といった幾多の困難を乗り越え、平成22年奇跡の地球帰還を果たしました。実に、7年の歳月をかけた60億kmに及ぶ

壮絶な旅でした。

世界中に感動を与えた「はやぶさ」。平成22年12月、同観測所でカプセルが公開されました。形をかえた「はやぶさ」、母港内之浦へ感動の里帰りを果たしたので。そして、次はイプシロンロケット。「はやぶさ」を打上げた世界最高性能の固体燃料ロケットM-Vロケットの後継機として開発され、平成25年、内之浦から打ち上げられます。人工知能、電子頭脳を持つ次世代型の、世界が注目する夢のようなロケットです。

ロケット開発の父 糸川英夫博士生誕百周年 記念事業 ―銅像建立―

我が国のロケット開発の父と呼ばれる糸川英夫博士は、大正元年7月20日に生まれました。そして、内之浦宇宙空間観測所の建設に当たっては、糸川英夫博士を抜きには語れません。

昭和35年10月24日、糸川博士が立ち小便をしながら、この地にロケット

射場の立地を決めた、この逸話があります。

それ以降、幾多の困難を乗り越え、これまで395機のロケットを打ち上げに成功し、27の人工衛星を誕生させました。

奇しくも観測所開所50周年の平成24年7月には糸川博士の生誕100周年を迎えます。本町では、「糸川英夫生誕100周年記念事業実行委員会」を立上げ、日本中の糸川ファン、宇宙ファンに広く呼びかけ、博士の銅像建立をはじめとした記念事業の実施を決めました。

11月10日、11日に開催されるJAXA内之浦宇宙空間観測所開所50周年記念式典に合わせて、糸川英夫生誕100周年記念式典を開催します。

銀河連邦・・・絆



銀河連邦は、宇宙科学の最先端技術を研究している宇宙航空研究開発機構（JAXA）の宇宙科学研究施設

設がある6市町（神奈川県相模原市、長野県佐久市、岩手県大船渡市、秋田

県能代市、北海道大樹町、そして肝付町）がユーモアとパロディの精神で、昭和62年に組織されました。それぞれの共和国が手を取り合い、相互の理解と親善を深めることにより、宇宙平和の一翼を担うとともに、人々の笑顔あふれるユートピアの創造を目指しています。

本町は「ウチノウラキモツキ共和国」、町長は共和国大統領です。内之浦宇宙空間観測所では、ロケットの打ち上げ、そしてそれらの追跡及びデータ取得等の業務を行っています。

平成23年の「3・11東日本大震災」は、銀河連邦の一員である大船渡市（サンリクオオファナト共和国）をも襲い、今復旧、復興に全力を挙げています。銀河連邦の各共和国、そして大隅半島四市五町（鹿屋市、垂水市、曾於市、志布志市、大崎町、東串良町、錦江町、南大隅町、肝付町）での支援は、これからも続きます。

博士の専門性を活かした地域おこし「町が研究フィールドになる」

研究者から提案される町の活性化策には多くの気づきがあり、地域に根ざした改革プランの創出につながる可

能性があります。

様々な挑戦を続ける本町は、平成24年度から若手研究者を応援するプロジェクトで、研究費助成と、その成果を活用した地域活性化に向け動き出します。

今回、「肝付町賞」として町が提案したテーマは、ズバリ「肝付町の農業の活性化」。一次産業が主体となる本町のような地方自治体にとって、新たな地域活性化策のモデルケースになるかもしれません。自然科学系のみならず、人文社会系を含む全ての専門家を対象としていて、実証実験やヒアリングなど、町内での活動・連携構築は町が全面的にバックアップします。この研究で得られる成果は、必ずや町の活性化に寄与するものと確信するところです。

宇宙大豆

「宇宙大豆」をご存知ですか？米国のスペースシャトルで、国際宇宙ステーションに滞在した大豆を、地球帰還後に植え付け、そして収穫したものです。本町では、この宇宙大豆プロジェクトにも取り組んでいて、平成23年植えた大豆は収穫され、平成24年の



植え付けを待っています。

町は、東京の醸造会社と提携し、「宇宙に一番近い町の宇宙大豆」を使った商品開発に取り組み予定です。数年後には、皆様の食卓に、この「きもつき宇宙大豆」が上るかもしれません。

田舎だけど、最先端？『光ファイバーの町』

町全域が過疎地域の本町において、都市部と遜色のない情報通信網の確立は急務の課題でした。そこで、平成22年度、町内全域に、光ブロードバンドサービスを受けられる情報基盤を整備



しました。

現在、光ファイバーによる高速インターネット（「はやぶさネット」と名付けました。）は俄かに注目を集めています。

遠隔の集落においては、高齢者見守り支援システムの運用を実証的に行っている、行政情報の配信や健康管理チェック、緊急放送の配信など、日常生活の支援を行っています。また、インターネット講座を開催するなどし

て、利用者拡大にも努めています。

今後は、このはやぶさネットを利用して地域に密着した住民交流の実施を進める一方、田舎（人口の少ないところ）だからこそ味わえる光ファイバーの速さを最大限にアピールして、ベンチャー企業などの誘致も図りたいと考えます。

また、町の魅力と民間情報の一体的な発信を実現するため、「総合ポータルサイト」構築に取り組みます。

このポータルサイトは、町の様々な資産（人・歴史・自然・伝統など）を町内外に発信することで、肝付町の全てをアピールできる「広告塔」にしていきたいと、取り組みの真つ最中です。農水産加工物など、町の特産品の紹介は勿論、ECサイトにより販売拠点を作り出すなど、新たな肝付ブランドで町の活性化を図ります。このポータルサイトは、官民が一体となって運営していくことが重要です。

町観光協会なども連携し、幅広い活用で情報発信に努めたいと考えます。
平成24年、9月には運用開始予定です。是非、肝付町の総合ポータルサイトへお越しください。

◀うちのうら銀河マラソン（11月第4日曜日）



銀河マラソン

銀河連邦共和国の建国を記念して始まった「うちのうら銀河マラソン」。自然とふれあい、未来を創造し、走る事の喜びを味わいながら、仲間づくり、健康づくりを図るため、毎年11月第4日曜日に開催されます。

えつがね祭り

本町内之浦地区では、古くから伊勢海老を「えつがね」と呼んでいます。



▲えつがね祭りチラシ（平成23年開催分）

「えつがね」は秋から冬の味覚の王様で、贅沢感を味わえる高級食材として高い人気を誇っています。

内之浦地区には三つの漁港があり、8月20日過ぎの伊勢海老漁解禁に伴い、各漁師が一斉に網を入れます。「刺し網漁」という漁法で、日の出前に太平洋に面した磯の際で巧みに船を操り、夜行性の特徴を利用して漁を行います。年間10トン近い漁獲量は九州でトップクラス。

毎年9月開催の「内之浦えつがね祭り」には新鮮な味を求め、多くの観光客が訪れます。

肝付町企画調整課 永井 宏

（平成24年4月2日付第2795号）